

「ムージル氏はまともなエンジニアになる見込みなし」

1902 年秋以降新米エンジニアのローベルト・ムージルはシュトゥットガルト工科大学で無給助手を務めた。しかし蒸気機関などには興味を示さなかった。そのかわりムージルは『テルレス』を書き始めた。

カール・コリーノ 2018 年 7 月 29 日

(早坂七緒 訳)

もともとは陸軍将校になるつもりだった。でもウィーンの軍事アカデミーで弾道学を学ぶうちに自分に工学の才能があることに気づき、三ヶ月後には皇帝の軍服を脱いで、1898 年 1 月にブリュンのドイツ工科大学に転学した。そこでは父親が機械工学の教授を務めていた。「この決断の突飛な点を別にすれば、彼がこの進路に踏み出した真剣さは銘記されるべきだろう」、長編小説の草稿『スパイ』にはこう記してある。「その際彼が示した諸特性は、非の打ちどころのない、現代の模範となる人生を生きる資格を与えるものだった」。その考えによればエンジニアとは、アルキビアデスとナポレオンが「市民の姿をとったもの」だった。



工学者は「未来の征服者」と思われた。こういうオプティミズムに乗ってローベルト・ムージルは三年半で学業を了えた。1901 年 7 月 18 日に授与された学位記には「きわめて有能」という総合評価が記されていた。とはいえ勉強中に、とりわけ実習のさいに、未来の同僚たちからきわめてネガティブな印象を受取っていた。彼が目にしたのは「製図板に貼りついた男たち。連衆は、指示を出す商売人たちに、いいように搾取されていた」。その人間性は「専門性のなかで揮発していた」。彼らは「偏った専門教育のおかげで、科学者の魂のもつ新しさ、工学的なものを、プライベートな魂に応用することがほとんどできなくなっていた」。

これは実際の経験に基づくものではないがムージルはスイスの工場に勤めたというフィクションを書き、草稿でつぎのように結論づけている。「うんざりするほど繰り返し排気口を取りついたり、二つ三つ溝穴を掘らされたりしたあげく、その機械が中国に納品されることに何の意義があるというのだ」。

そうとは知らずに父アルフレート・ムージルは、息子を生業に就かせる理想的なアプローチを模索していた。シュトゥットガルト工科大学の高名な同業者、カール・バッハ教授とコンタクトをとり、シュヴァーベンで一年足らず無給助手として修行させる手筈をととのえた。給料はムージル家の負担である。

省エネ・モード

カール・バッハは1900年頃その分野では権威だった。エルツ山地出身の機械工見習いから身を起こして、シュトゥットガルトの教授職に登り詰めた。1881年に上梓した機械要素についての本は、たちどころに工学者のバイブルとなった。1889年、90年には弾性と強度に関する著書が続いた。カール・バッハが新しい研究分野の教皇であったのは確かである。五十台なかばに達しても泥まみれの作業を厭うことはなかった。駆動ベルトの下に潜り込み、粉塵の舞うただ中で摩耗を計測した。ムージルが——少々ダンディ気取りで、陸軍幼年学校以来汚いものにはアレルギー反応を示したムージルが——同じことをしたとは思えない。

1902年10月20日からカール・バッハはムージルの新しい雇い主でありマイスターであった。バッハの勧めにより10月17日にはシュトゥットガルトに着いた。ウルバーン通り46に部屋を借り、つぎの月曜日に着任した。なんとも奇妙なことにこの無給助手氏は、早くも着任一ヶ月後に勤務証明書を要求している。これは最近シュトゥットガルト大学のアーカイブで発見され、早坂七緒によって日本で公表されている。

「技師ローベルト・ムージル氏について、(…) 本人の要請により証明する。氏は機械工学関連領域における実験実習の熟練を目的として当地に滞在し、下記署名者の指導のもとに実験実習作業に従事している。// C. バッハ」

なぜムージルが着任後4週間にして証明書を必要としたのかは明らかでない。オーストリアの何らかの官庁のため？ この証明書が父アルフレートを満足させたのかもしれない。息子ローベルトが出発前に無給助手という立場を閑職とみなして、手を抜くつもりだと漏らしたからだろうか？ ムージル自身の回想が、着任後まもなく仕事については省エネ・モードにギアを入れたことを裏づけている。遺稿「遺言II」でざっと30年後にこう回想している。

「ぼくは二二歳だった。その若さですでにエンジニアであり、自分の職業に満足して

はいなかった。毎晩八時半に恋人 [ヘルマ・ディーツ。ブリュンからムージルとともにネッカー河畔のシュトゥットガルトに来た。彼女は短編「トンカ」の主人公トンカのモデル。] がやってきたが、ぼくは六時には仕事場から戻っていた。そうした生活の場であるシュトゥットガルトはなじめず、親しめなかった。ぼくは仕事をやめて、哲学を勉強したかった (やがてそれを実行した)。自分の仕事はさぼって、勤務時間中に哲学の勉強をした。夕方近くになって、それ以上頭が受け付けなくなると、ぼくは退屈した。それで書くことを始めた。すぐ使える素材が手近にあった。それが『陸軍生徒テルレスの混乱』の素材だった。」(北島玲子 訳)

手紙爆弾

カント、マッハないしニーチェを読むために静かな片隅にひきこもり、これで上司カール・バッハの死角に入ったとムージルが思ったとしたら、大きな間違いだった。最初の証明書を出してからカール・バッハは続く一ヶ月、若き同僚がさぼる様子を観察していた。クリスマス休暇にムージルが発発する前にもう、最初の話し合いがあった。このことはカール・バッハが父アルフレートに宛てた手紙に書いてあり、事態がドラマチックに切迫するのは翌 1903 年の 2 月になる。この手紙は最近ケムニッツ大学のアーカイブで発見された。

[190] 3 2月11日

ムージル教授 殿

ブリュン

拝啓

あなたの昨日の書状に対して、あえて以下の所見を記すことにしたい。過日わたしはご息子が機械技師の職業をめざして努力しておられる [?] ものと考えていた。彼はこの方面に関心がありません。実験の際にはわずかな自発性 [?] すら見せません。ゆったりとなりゆきに任せ、要求されたことをするだけです。彼のやる気を刺激しようとして、タービンと蒸気機関を制御する最新の電気装置の施設に連れて行きました。ちょうどわれわれが試験しているところでした。彼の関心はほぼゼロでした。人間性の観点から彼を傷つけることのないよう、彼をわたしの家庭に招きました... [?] ここで営まれている事柄——そのためにあなたは彼をここに派遣したのですが——に対する関心を、わたしは彼に認めることができませんでした。

これらすべてを踏まえてわたしは、ご息子が帰省する直前に (クリスマス期間に) わたしの意見を率直に説明しました。その際つけ加えたのは、彼がここにいるのは、あなた、つまり父親が彼のためを思ってそれを望んでいるからであり、彼はあなたのためにあなたの意志を為しているだけだ、という印象をわたしがもっているということです。彼はあっさりそれを認めました。とはいえわたしには... [?] 彼がわたしに対して示した率直さのこともあり、彼の態度に変化がみられるかもしれない、という気

持ちもありました。1月初旬に戻ってきた彼は改めて、以前に代わらぬ無関心ぶりを示しております。

正直に申し上げます。このような事態に直面してわたしはただただ、同僚としてのあなたに発した同意に縛られて、ご子息をお預かりしているばかりだと感じております。きびしく活を入れてみても——いつもなら若い男子を鼓舞することになるのですが——彼には無駄でした。ご子息の面倒を見るよう言い含めたもっとも有能な助手が影響を与えようとしても、効果はありませんでした。それゆえ一週間ほど前にわたしは心中こう言いました、ムージル氏は決してまともなエンジニアにはなるまい、と。ご子息はもともと頭脳明晰で賢明〔?〕な方ですから、わたしがあなたに助言できるとすれば、彼に別の進路を取らせるようにということだけです。いつご子息をお引き取りになりたいか、あなたのご回答をお待ちします。

謹白

C. バッハ

訓戒

ブリュンのムージル家にこの手紙は爆弾のように落下したにちがいない。かわいいロプシ、「お砂糖ちゃん」、「カタツムリちゃん」が、能なしの期待外れだとは。家族にとっても彼に資格をあたえた工科大学にとっても面汚しだなんて。「新式のタービン式発電機だの、蒸気機関制御装置のピストンの滑らかな動きだのを目にしたら、ベルヴェデーレのアポロなぞに、もう何の用があるというものだ」(MoE 37) とのちに書くようになるムージルが、シュトゥットガルトのタービンと蒸気機関を制御する最新の電気装置の施設に案内されて無言を貫き、まっとうな関心を見せることはもちろん、関心を装うことすらできなかったのである。エンジニアになるための三年半の学業は、優秀な成績ともどもグロテスクな錯誤だったというのだろうか？

疑う余地もなくアルフレート・ムージル教授は底なしに落ちこみ、息子を恥じた。二通の手紙をシュトゥットガルトに書きたらう、一通はカール・バッハに、もう一通は息子に。カール・バッハにはお詫びし、事態の徹底的な改善を約束したらう。息子は訓戒を受けとった。金銭上の威嚇までそこに含まれていたかどうかは分からない。いずれにせよ無給助手ローベルト・ムージル氏は年額 4000 クローネの俸給を、父親の内帑金(ないどきん)から引き出していた。その結果として。カール・バッハはなだめられ、息子ローベルトは勤勉と精勤を約束し、また果たしたにちがいない。さもなければ彼が8月半ばまでシュトゥットガルトに滞在できたはずがないのだから。

1903年4月1日付けの二通目の証明書をみると、まるで危機があったようには思えない。解雇の恐れなどなかったかのようだ。

「ブリュン出身の技師ムージル氏は、冬学期中、われわれの施設で弾性および強度の実験に参加し、それに伴う計算を遂行した。同様にムージル氏は、署名者の指揮下にある工科大学の機械工学実験室で、都市ガスの発熱量測定、計器表示および制御に関与した。

本人の要請によりここに確証する。

所長

C. バッハ」

1903年4月15日から5月12日までムージル少尉は軍事訓練を受けなければならなかった。郷里ブリュンに滞在するこの機会を利用して、父親と問題を解決する話し合いをしたにちがいない。「ご令息には[エンジニアとは]別な進路を取らせては」というカール・バッハの提案が実を結んだのかもしれない。アルフレート・ムージルは1903年5月に以下の点に同意したのかもしれない、すなわちローベルトが遅滞しながら高校卒業資格（アビトゥーア）を取得し、哲学を学ぶために冬学期にベルリンに行くことである。

方向転換

シュトゥットガルトへの帰還は、デーガーロッホへの転居による住居の変更もふくめて、新たな出発となった。ムージルが持参した船旅用大型トランクのなかで、古典語の教材が重要な位置を占めていた。学位を取るためには文科系のアビトゥーアを遅ればせに取らなければならなかった。すなわちラテン語とギリシャ語を大急ぎで詰めこむ必要があった。このあとムージルは三輔式農法をいとなむことになる。すなわち機械工学実験室、『テルレス』、そして古典古代語の文法と語彙である。

1903年8月1日に以前からの知人、グラーツ出身のテュルカ夫人に宛てて書かれた手紙は当時の様子を物語っている。

「これまで試験をあれこれ受けたことはありますが、時間を節約しなければならないということがどういうことか、今ほど身にしみて感じたことはありません。一日の活動時間はおよそ一六時間ですから、生活にどうしても必要なことに使える時間はそのうちのせいぜい三時間です。そんなふうに切りつめたところで、時間は足りません。二週間後には田舎の両親のところに行くことになっているのに、その前に語学の勉強をある程度進めなくてはなりません——机の上には、どうしても読まなくてはならない本が山積みです——ちょっとした文学的な仕事（あなたにお見せするようなものではなく、通俗科学的なものです）をかかえていて、一〇月の初めまでに渡すという約束を編集者としてしています——おまけにこの馬鹿げた小説。それはぼくの心に必ずしも適（かな）っているわけではないのですが、ともかくそれを完成しようと思いついたのです。」（B8）（北島玲子 訳）

1903年8月半ばごろにオーストリアに戻るところに、『テルレス』初版316頁のうち、優に三分の一は出来上がっていたかもしれない。草稿が完成したのは1905年2月とみられる。産みの親はシュトゥットガルトで前半に覚えた退屈だった。産婆役を務めたのは当時の花形批評家アルフレート・ケルである。1906年12月21日にベルリンの『ターク』に載った先駆的な書評で彼はこう書いている、

「ローベルト・ムージルは南オーストリア生まれの二五歳で、後世に残る書物を書いた」(北島玲子 訳)

アルフレート・ケルのこの予言は正しかったことになる。